大人のための知的好奇心マガジン

ACT4

2020
JUNE
JULY

アクト・フォー
96

大師号下賜1100年記念
密教の真理 — 曼荼羅に秘められた空海の想い

続・空海の祈り

PRAYERS OF
KUKAI
PART II

丹生都比売神社 いにしえの能舞台

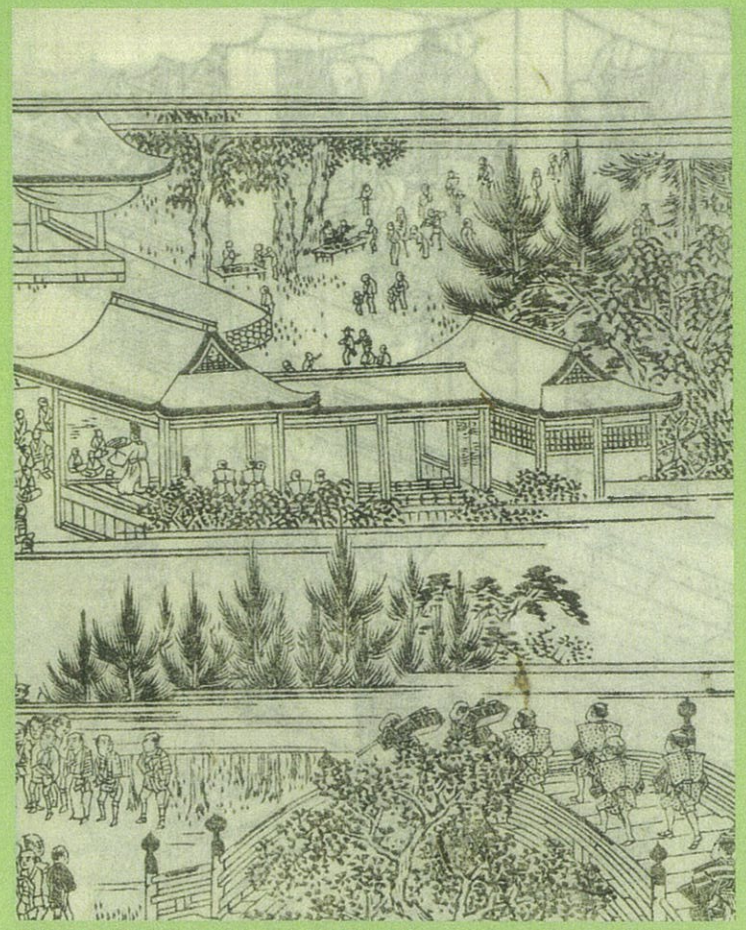
丹生都比売神社の舞台と楽屋

高野山大学 総合学術機構課長
木下 浩良

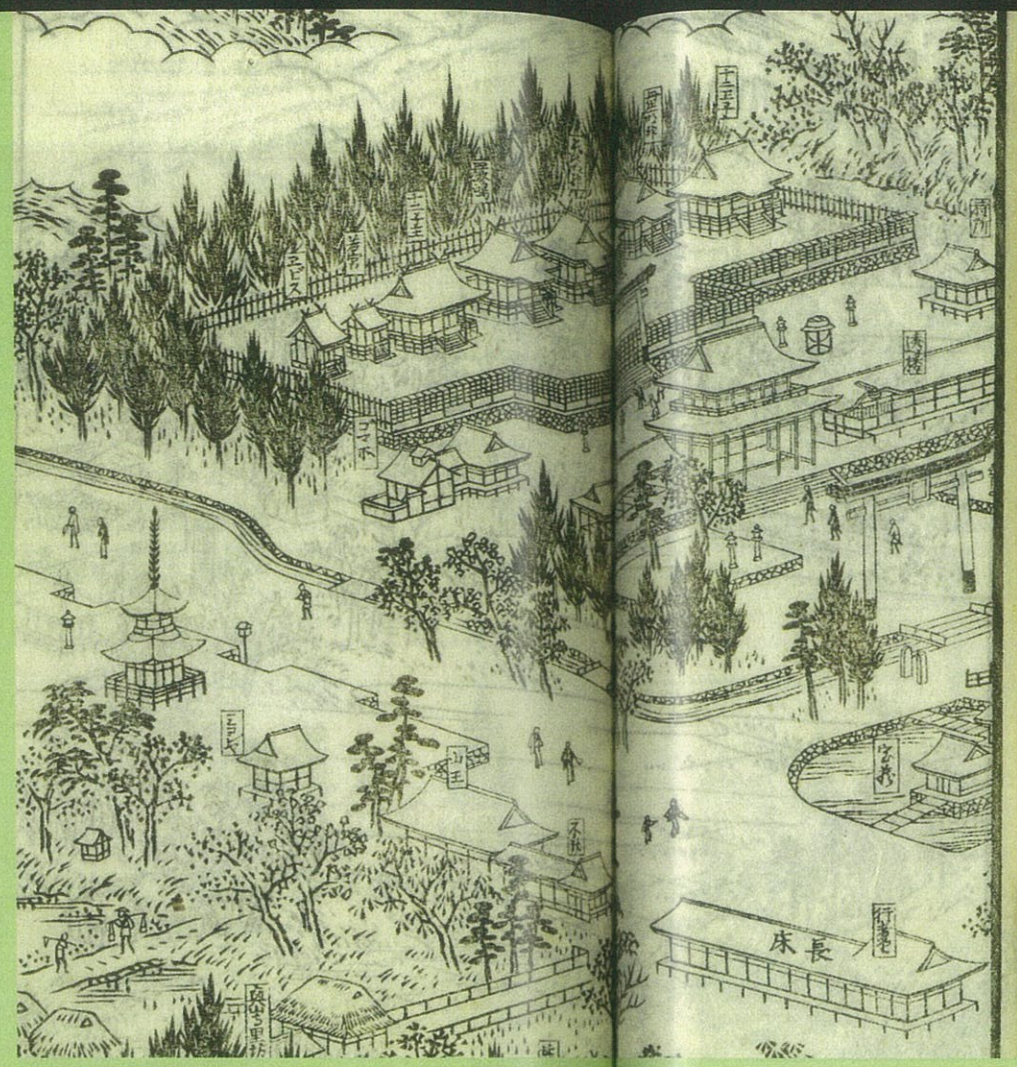
高野山への登山の中腹の天野（かつらぎ町天野地区）と称される盆地には高野山の地主神の女神である丹生明神と男神の高野明神を祀る、丹生都比売神社が鎮座する。同社には江戸時代後期に成立した『紀伊国名所図会』によると、現在の社務所付近に回廊でつながった舞台と楽屋の建物が存在した。これは現在で見られる、能舞台であった。かつて、毎年六月一七日と一八日の両日に能が興行されていた。この時は大勢の参拝人で賑わった様子が同名所図会に描かれている。この行事のことを「笈渡（おいわたし）」と称していた。笈渡とは、山伏が山野で行（ぎょう）を行った後に山から出てきて、背負っていた笈※を迎えた山伏に渡す作法をいう。六月一七日は、山伏が夏の峰入りの修行を終えた後になる。厳しい行を終えた山伏は、身体に山の精気が溢れているとされていた。その山伏がその力を披露する験競（げんくら）べをした場所が、同社の能舞台ではなかったかと推察する。山伏が見事な舞を繰り広げたことを想像する。

同社の歴史を紐解くには、高野山を開いた空海以前にさかのぼる必要がある。「こぶとりじいさん」の昔話のように、お爺さんのこぶを取ったり付けたりは、山伏が山中の修行で得た験を競う験競べであった。

※「笈」は、山伏が背負う仏像・仏具などを入れた箱型のもの



『紀伊国名所図会』に、舞台と楽屋の建物が見て取れる

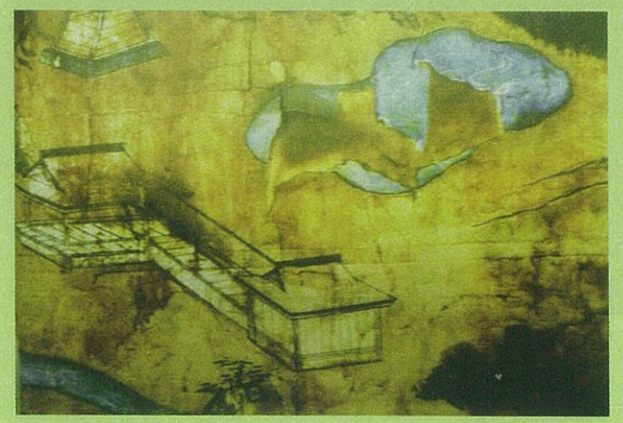


『紀伊国名所図会』天野社 境内図

同社は、大峯や葛城修験の聖地に入る入口であった。高野山の僧侶も、鎌倉時代から南北朝時代にかけて大挙して天野から入山している。同社内にはその証拠となる貴重な遺物が残っている。それが、四基の石造の大型五輪卒都婆（ごりんそとば）である。数百人に及ぶ高野山の僧侶が、入峯（にゅうぶ）した記念碑となっている。

高野山は、「歌舞音曲」が禁止であった。そのタブーを破ったのが、能を好んでいた豊臣秀吉であった。現在の金剛峯寺前で舞台を設けて、「高野参詣」の能を挙行したが、晴れていた空がにわかに曇って雷電が鳴りとどろいた。秀吉は恐れおののいて、高野山を下山したとされている。この高野山とは反対に、天野では芸能が発展していったのであった。

なお、同社の舞台と楽屋を描くものに、金剛峯寺所蔵の宝暦三年（一七五三）『天野社絵図』と、東京高輪の高野山東京別院が所蔵する同社を描いた絵馬が挙げられる。この中では、東京別院の絵馬が古く、江戸時代初期から中頃の様子を描いている。



『丹生都比売神社』を描いた絵馬（高野山東京別院 所蔵）

木下 浩良 HIROYOSHI KINOSHITA

1960年福岡県柳川市生まれ。1983年高野山大学文学部人文学科国史学専攻卒業。現在、高野山大学総合学術機構課長。高野山大学密教文化研究所受託研究員。東京大学史料編纂所共同研究員。日本山岳修験学会評議員。学校法人高野山学園評議員。著書に『戦国武将と高野山奥之院』他、多数。専門は仏教考古学・高野山史。